

長三洲雑話

高倉芳男

咸宜園では三才子として、田代潤卿、広瀬材外と才名を競い、幕末の風雲急なるに処しては、勤王の大義に奔走し、退隱後は詩、書、画に、娛しむ、殊に書は、東宮侍書に任ぜられた長三洲は郷土の幕末明治史上欠くべからざる人材であるので小文を草することゝした。

三洲、名は英（ひかる）字は世章、幼名富太郎、のち光太郎、また主馬、蝶生、胡蝶生、横三、愁、南陽、秋史、殊陽、丹敵、紅雪、韻華とも号称した。

まづ長家について述べると、その先は、公家の長谷氏の出である。九州に下り、筑後の莊嚴寺に住したが後に日田郡五馬市村（現天ヶ瀬町五馬）の専称寺に移った。放代をへて從超の時に還俗して良民といつて馬原村（天ヶ瀬町）虎丸に移り医業のかたわら、手習師匠をしていた。良民の子は寺に残つていたが後赤石村（天ヶ瀬町）の小野氏に頼り、医学を学びのいで広瀬淡窓の咸宜園で学んだが後に父の良民のいる馬原村の虎丸に移つた。これが一名は充、字は充文、号は梅外また

南梁」で、前述の三洲の父にあたる。梅外詩鈔、在邇録、左伝彙箋等の著があるのでわかるように、儒学、詩文、書画に長じていた。（文化七年生、明治十八年没、七十六才）、尚ほ彼の時に、従来の姓長谷を「長」と改めた。同村矢瀬の矢幡郡右エ門の女を娶り、そのための便宜もあつたであらう、義姉の婿 武右エ門の矢瀬の宅で開業した。そんな事情で三洲は武右エ門の宅で生れた。時に天保四年（一九三三）九月廿三日である。これは父梅外の二十四の厄年であると言うので、それを忘む当時の風習から、同部落の高倉周兵衛方に捨子としてやられた。尚ほ久大線豊後中川駅から玖珠川を隔てた対岸、高塚地藏尊への参詣の道に面した馬原小学校の校庭に、

勤王家三洲長先生誕生地

世話人 穴井安次 高倉善六

武石順三 武石繁次

と刻した碑石が立っているが、これはもとは同校前の高塚道の向い側の端で現在の倉島与市氏宅の裏にあたる位置にあつたが、高塚道路建設のため現位置に移転したものである。

三洲について春堂（後述）、静子、倉之助（天保一四年生、安政元年咸宜園入門、安政六年没。名は千翼、字は燕、詩に長じていて静土遺稿がある）、四郎（弘化三年生、安政三年咸宜園入門、名は革、子

金、綱吉とも云う、詩画に長じた、戊辰の役にも活躍、明治十九年没等の弟妹が次々に生れた。

この間に父極外は天保十年に英彦山の座主甘露明王院権僧正教育に招かれて祐筆となり、かたわら村塾を開いて子弟を教育する事になった。それで三洲達も、後に英彦山の父のもとに移つた。

三洲は天性恵まれた才をもつていた、「三洲長君墓碑銘」には

君幼にして秀異、業を家庭に受け、九才にして四書五経を誦す、十一詩を賦すること成人の如し、人神童となす：：

と記されており、大分県偉人伝によれば

幼にして神才秀悟、書をよみて五行並び下る、見る処記憶せざるなし、

弘化二年十月、長谷主馬と称して広瀬淡窓の塾に入る、淡窓目して

神童となす、常に戒めて曰く「我其の才子たるを望まずして才翁たるを望む」と。

※三洲居士集の五言絶句「南岫」は数へ年十一才の作である。

弘化二年十月廿一日、父極外の紹介で咸宜園に入門した。「英彦山座主内、長谷允悻、長谷主馬、十三才」と入門簿に記されている。これは淡窓の日記（進修録）弘化二年の項にも「…長谷允、男主馬ヲ

携へて来ル、入門ス、共ニ留リ宿ス、酒ヲ共ス、慎治、石舟、範治与

ニス」と記してある。ところが同廿四日の項に「長谷允父子去ル」と

出ているので此の間の滞在は四日である。そして翌々弘化四年一月十

七日に「長谷允、男主馬、愛二郎ヲ携へて来訪シ、留リ宿ス」と出て

おるがこれは入門のための来訪で、十八日に「長谷允、及二子塾ニ入

ル、愛二郎入門 主馬ハ是ニ先シジテ入門」と出ている。また大分

県偉人伝に記されている「父極外は寺子屋の師匠たりしも家貧にして

資に乏し、常に土豪に寄食して、以て宜園に学ぶ：」は此の間の

消息を物語っているものである。即ち弘化二年に一旦入門はしたが、

四日後に去り、改めて弘化四年に入塾したことになる。更に入

塾七日の一月二十三日に三洲は塾を出て、千原寿作の家に寄寓して、

そこから咸宜園に通学した様である。

同一月廿五日の月旦評で入席し、

同二月廿五日には三級下に躍進し、

翌々三月廿三日の月旦評では四級、下にと目ざましい勉強と進歩の

跡がみられる。そして遂に翌弘化五年の五月の月旦評では、

光太郎、四権八級下

という成績である。その翌六月朔日には一時塾を去っているが、嘉永二年（弘化六年）二月一日には在塾していて、その廿五日の月旦評で

は、「四権八級上」となっているが、これは此の時の月旦評での最高である。

淡窓は懐旧楼筆記天保十六年（弘化二年）の入門者を挙げて更に著名な人物を説明しているが

長谷主馬、彦山人、……主馬ハ允が子ナリ、後ニ光太郎ト改ム、八級上ニ至レリ

と言っている。併し嘉永三年二月には「九級下」に昇っている。言うまでもなく九級は、「九級之難如昇天」とか「九級之栄以衣錦」と言われた最高の栄位であるが、三洲は弘化四年十五才の入席以来四年目（約二年半）の十八才（満十六年六ヶ月）の短日月で、此の栄位をかち得たのである。

最高の栄位に達した翌々四月十一日に塾を去つた。淡窓はこの門弟の立に際して、

人間神童後米多不神者、畢意是何物、答曰、内園分得温湯水、二月
中旬己進瓜、若世章誠神矣、抑亦由庭訓之勤也、子曰、賜也日捐、
商也日益、賜好与不若己者勉、商好与勝己者勉、才勝世章也、皆有
一長、苟求益焉、自少而壮而老、日就月將、則以神始、以神終者、
我於世章見之。（長世章乞言）

と、この神童であり才子である三洲に餞をしている。

この前年にはイギリス軍艦が那覇にフランス船が津軽沿海に渡来しいよいよ国内、国外共に多事多難の幕末である。この後淡窓に、淡翁称我門弟第一才子、十八出遊豊肥之間、所在教授と言われているように、約四年間は、肥、筑、豊の地をめぐつて塾を開いて子弟を教育したり、家族の世話をしたり、其間に郷里の日田に帰つたりし乍ら見聞を広めていた。

三

その頃淡窓の弟旭窓は大阪に塾を開いて子弟を教育していたが、三洲の才名を聞いて都講として招いた。此処は文化の中心である大阪ではあり、殊に変動期のことゝ、多数の人材が集つていたので、大いに名士達と交り、その影響もうけて勤王の志士として活躍するようになった。

為都講、周旋京撰諸名流間、才名益起、城代士屋候老臣大久保要豪
邁有大略、夙持尊攘之説、君与之交、大有所感憤、始用心国事（三
洲長君墓碑銘）

また

僧白華と交り善し、白華名は曄、松本氏、加賀松任の人なり、性学

を好み、介然不群、憂国の志あり、三洲其の人となりを受し、遇するに知己を以てす、一夕燈下与共に志を談じ慷慨禁ずる能はず、唏嘘涕下るに至る、三洲慨然として起ち、刀を抜き燈檠を斫りて曰く、「男子たるもの骨を青山に埋むるにあるのみ、豈碌々一燈檠に啣せんやと、白晳も亦拳を揚げ案を拍つ、案幾ど裂く：：（大分県偉人伝）

と伝へられている。

大阪の旭窓塾三年（安政二―四年）の後、三洲は帰国することになったが、これはもとより勤王憂国の志から出たものであらう。さて日田に帰つたが、恩師淡窓は昨安政三年十一月に逝去しているので、恩師の墓に詣り、各地の旧友や志士を訪うては旧交を温めたり、時事を論じたりしている。

七月七日、同青邨五岳林外鶴陽游龜山、飲于清陰亭

交人意常短、出戸興偏長、石雨浮新暈、樹秋揺古香、登山孤塚、臨水一亭涼、邨酒正堪醉、清吟何厭狂、

初冬四日茂園夜座時將游山陰

登山臨水送秋帰今幾日耳吾將東目断不見秋去処我行遠指雲指雲飛中

千巖萬壑山陰道：：

等は彼の當時を物語つてゐる一例である。

万延元年東に再度の遊歴を志して長州を通つた時に、長藩の学者土屋蕭海を訪ねた、蕭海は三洲の人物に傾倒して、早速重臣の宍戸真澄、周布兼翼に謀つて三洲を明倫館の講師とした。吉田松陰の刑死の翌年、禁門の変に先立つ事四年の長洲である、共に尊王攘夷を論じたに違いない。併し八月には一度帰省している。

文久三年藩名を奉じた土屋蕭海が豊肥筑の諸藩に尊王攘夷の遊説を行つた時に、三洲も行を同うして之を輔けた。三洲長君墓碑銘には、「君亦説彦山僧徒、及一豊草奔志士応之、小倉藩吏探知、將捕君、僅免」と記されているが、此の間のことについて次の話が伝つてゐる。

文久三年八月頃長三洲は土屋蕭海を同道して、郷里なる日田郡馬原村矢瀬を訪れ、生家矢幡武右エ門宅と養家高倉又左エ門宅へ夫々凡そ一ヶ月間余滞在した、その間三洲の妹光女（ミチ）と土屋蕭海との婚姻問題もあり：：後日を期して婚礼の式をなすべく約した。九月中旬に二人は多くの人々に見送られて矢瀬を発足した。馬原村矢瀬より隈町に至る迄、近々二里半の途上も勤王臭味のある者を追捕するに急なる天領日田の代官所の足許に入りこもうとするのであるから、二人は十分身边を警戒して密かに隈町に入りこみ、かねて昵懇なる田中町の伊勢芳こと佐藤春虹方に一先づ落着き、専念寺の平野五岳上人、豆

田町の千原夕田、広瀬林外等の知己の諸氏に久々の対面をして幾日かをすごし、千原夕田の惣眼山上の草庵に於て土屋蕭海は一先づ国許の長洲へ帰国すべく東にむけて立ち去つた。その時分、長藩奇兵隊の棟梁高杉晋作は彦山の義徒を召集して大坂城を襲い、大和十津川の中山侍従忠光卿の義卒を応援しようとしている。土州、水戸等各地の義軍雲の如く起りて長藩の義軍に馳せ来ろうとする形勢をあらはして来た。此の状を目撃した良什坊、教観坊、祐玉坊の三使は三条公の親翰を携へて防州三田尻より帰山した。彦山の衆徒は三田尻の景況をきくのみならず、三条公の親翰をも領し、誦躍してその素懐空しからず、尊攘の義卒決行の時機到来と大いに喜び、一層氣勢をあげて相往来して謀議するに到つた。

折柄薩藩の白浜官兵衛（後に日田県知事松方正義のもとに、九等官大参事）、筑紫衛門、筑前の伊丹慎一郎、田代の緒方一郎をはじめ各藩の志士踵を接して彦山に登山しつゝありとの情報の日田堉言閣（水月亭のことで貫名海屋の命名）に身を匿している三洲の下に達した。明日は豊前の彦山に潜行しようとして、家の主人春虹と一盞を傾けていた三洲は、やがて晩秋の三隈の川流、亀山の明月に画情を催し主人春虹のために画箋を展べると、有合せの香筆をかねで一氣に筆を走らせた。一幅の山水がまだ半にも及ばない時に、「今晚は手が這入りさ

うだ」との密報が一座を驚かした。三洲は黙したまふ筆を動かした。画は出来上つたが落款の暇はなかつた、三洲は筆を擱いてそのまゝ席を立つたそして彦山に走つて漸く幕吏の手を逃れた。さて三洲は成円坊に会している彦山の義徒や各地から集つて来た志士達と会して、大いに尊王攘夷を勵し、策を授けて自らは藤井衛門、水谷左門、等の八僧を率いて出発し、小倉表へ下り馬関に渡航して長軍に入り、三田尻に転陣して三条公の守護に當つた。（日田勤王事蹟考）

あくれば元治元年の八月五日、米英蘭仏の四ヶ国艦隊は、昨文久三年五月の下関海峡における長州藩の米船砲撃につゞく各国艦船の砲撃に対する報復手段として、下関の長州藩砲台に砲撃を加えてきた。この時三洲は前田砲台を固守して部下を叱咤した。その状は

君既入奇兵隊、守前田砲台、敵砲撃如百雷齊発、海震山撼、君督部下、拒戦大呼指揮、唇焦舌燥、不能復出声、部下亦疲、日暮交綏、翌日敵破壇浦、上陸来迫、君勦兵禦之、殊死苦戦、七退七進、流彈中君項、鮮血淋漓、部兵昇而逃、既而和成、傷亦癒

如何に奮戦したかゞわかる。長藩は此の外寇に加ふるに、十三日には長州征伐の令が下された。この結果は従来尊王攘夷を主唱した志士達の勢力失墜をもたらし、これら正義党は俗論党の危難から多く他に逃

れた。三洲も止を得ずに長府侯に身を寄せるに至つたが、此処でも侯に時代の趨勢を説いてその信頼するところとなつた。後に慶応二年には侯の使節として筑前に行つて西郷隆盛と会つて、薩長連合の利をとりて諒解せしめたのもこれによる。この薩長連合が、歴史上如何に重大な役割を果たしたかは贅言を要しない。

その間に、豊の地において、同志を募つて事を揚げようとした。慶應元年の秋、別府浜脇の海老伝に潜伏中、主人等の求めに応じて書画を描いて興へたが、この潜匿中のもものは既ね、蝶生、胡蝶生（蝶は長の意か）の落款であるという。併しこれが世評を高めて三洲である。三洲が潜れていることが幕吏にわかつて、追はれて佐伯に走つて同じ咸宜園出身の秋月橋門に頼り、更に二年には佐賀関に現れたが、さらに

兎佐賀関留別館主吟松

騷人游跡任窮通 廿日南樓為寓公

小市春過寒食節 古閑花落雨声中

生徒幽憤連朝病 吹到離愁一笛風

他日揚州問前夢 誰知杜牧是梁鴻

とあるように吟松和尚に留別して長州に走り奇兵隊に投じた。宛もこの時長州では正義派が勢を回復したので、元年四月の幕府の長州再征

令、翌二年六月の出兵令となつたので、奇兵隊に入った三洲は大いに奮戦して幕軍を破つた。幕軍各方面に敗退し、しかも七月廿一日には十四代將軍家茂が大坂城に拠つたので、八月二十一日に將軍の喪を以て征長の軍を停止するに至つた。

さてこれよりすこし前、幕軍を破つたのちに三洲は日田に潜入して隈町の堆青閣に匿れていたが、堆青閣の主人伊勢芳の兄に伊勢清と云う者があつた。兄ではあるが賭博、喧嘩を好み無頼の徒と交る他人のものを強請る悪人なので町内から指弾されていた。それ故実弟の伊勢芳が本家をつぎ、若干の財産をもらつて分家させられて不平不満であつた。この伊勢清が或事情から本家に、一人の浪人風のものゝ潜伏している事をしり、直ちに稲荷下し（孤使い）の秘法でその浪人こそ窪田郡代が必死で探索中の三洲であると知つて、永山の布政所に密訴した。

役所では大いに喜び、夜間不意に襲撃して三洲を逮捕すべく、先づ町内の番所々々を一層敵軍に固めて日没を待つた。時あたかも初夏の候、今まで晴れ渡つていた空はみるみる黒雲覆い雷鳴轟き、一陣の怪風颯と吹き下すとみるや車軸を流すが如き豪雨が襲つて来た。雨は夜に入つてもやまず、その中を日田代官役所の捕吏拾余名は十分の身仕度をして、ドツと一度にかねて手筈の伊勢芳を襲つた。併し伊勢芳で

は主人春虹が町内の緊張した動静に不審をいだき、三洲の身に危険の迫っている事を看知して決意する処があつたので、直に三洲を物置の奥まりの古櫃の中の夜具の下に潜匿せしめておき、捕吏に對面して殊更に屋内の搜索を求めた。かくて代官所の捕吏は嚴重な警戒のもとに伊勢芳を捜査したが、遂に三洲を逮捕する事が出来なかつた。

翌朝は夜來の豪雨で隈川は大出水、濁流は物凄い勢で奔騰して流れ、三洲はこれこそ究竟の逃れる好機とし、主人春虹をして一葉の渡舟と最も上手の舟のり二人を雇はしめ、三人は甚八笠に簷がけの扮装で伊勢芳の裏手より濁流を横切つて対岸の芋市村に達し、それより筑後、筑前を経て小倉に出で、無事長州に渡航したのであつた。

日田郡代役所では其後も探索をつづけたが、三洲が潜伏していた形跡がないので、平素より不心得の伊勢清が私怨から、実弟伊勢芳を陥れんとする手段のための虚構であり、役人を愚弄したものであるとして手鎖の郷宿預けという事になつたが、親類組合組頭等連署の託証文で僅に事なきを得たのは七月の事である（託証文は略す）

四

同年八月、府内に潜伏していた三洲は討幕の兵を挙げようとしてい

たが、討幕の第一号は日田にある西国筋郡代を斃す事である。窪田郡代は性豪毅、且つ肥後小倉藩と結んで尊王到幕派殊にその巨魁長三洲の逮捕に全力をあげていた。このために弟春堂の獄死と云う痛ましい事がおこつた。

春堂（天保七年生、咸宜園に学び後肥後の採水玄門に医を学んで、柚ノ木村（現天ヶ瀬町）上の釣に開業していた。父や兄のように尊王家でもあつた。八月末、府内の両親や兄に會つて、父や兄から親戚にことづけられた書画を携えて郷里に向い、玖珠日田境の萩ヶ原にさしかゝつた、そこで知人宅に一泊したが、礼の気持で所持していた三洲の一幅を残しておいた。同家では喜んで床の間に掛けておいた。これを程遠からぬ某寺の僧が托鉢に来てみていたが、落款に「胡蝶生」とあるので、かねて布令の出ている長三洲に違いないとして郡代側に密告した。やがて郡代目付山本本哉が捕手十余人をひきいて先づ柚の木村庄屋を案内に立て、上の釣におしよせた。その時春堂は矢瀬部落に往診に往つていたので、その旨を申し上ると共に、別に急使をして春堂に知らせた。報せによつて当場の急をのがれた春堂は、矢瀬の裏の杉木立の中の岩穴に匿れていたが、「自分を捕えねば、必ず父や兄への追急が急になるであらうと思つて、親戚の者にたのんで急を父兄に報せると共に自首して出た。梅外と三洲はこの報で難を免れる事が出来た。以来入牢一年、あと三日で大政奉還と云う慶応三年十月十一日獄

中で病死した。維新後、白河神祇伯より己等芳耶神の号を賜り長家では上の釣に社を建てて祀った。

長州より京都に上つた三洲は、幕府征討軍が東下するや仁和寺宮総督のもとに参謀として北陸道に向い、長岡城奪還、会津平定等に軍功があつた。その後文部大政兼教部大政、修史局一等編輯官等となり維新の諸改革に貢献する処が多かつたが、明治十一年(四十六才)致任してのちは、明治天皇の特旨による侍書侍読の他は官職につかず、専ら自適の生活を送つていた。明治二十七年東宮侍書を命ぜられた、翌二十八年正五位に叙せられたが、三月十三日六十三才で歿した。遺著に三洲居士集がある。

後記

わかり易い略伝の積りでとりかゝつたが、思うように行かぬので雑話と題してその一部を述べた。尚ほ調査に行つたが三洲の生誕より百四十年、歿年より七十余年、生前の三洲を知っている人は、出生地には殆んどいない。大てい又聞きか、郷土史家の説を聞かされるだけであつた。

参考資料

話

故武石繁次氏の話

高倉麻二氏の話

文書

三洲居士集、日田勤王事蹟考、淡窓全集、勤王烈士長光太郎、大分県偉人伝、天領日田の破瀾、咸宜園入門百家小伝、咸宜園と日田文化。